

● 2014年度の活動(続き)

公開研究会(協力)

研究会「トラウマ文化、観衆と情動」

日 時:2015年2月26日(木)
場 所:甲南大学18号館3階講演室
講 師:キャサリン・ハリントン(東京都現代美術館インターン)
コメンター:森 茂起(甲南大学、臨床心理学)
企 画:石谷 治寛(甲南大学人間科学研究所博士研究員)

公開研修会

第12回KIHS心理臨床ワークショップ
「NET(ナラティブ・エクスプロージャー・セラピー)を
学ぶ—人生史を語るトラウマ治療—(一日半コース)」

日 時:2015年2月28日・3月1日(土、日)
場 所:甲南大学18号館3階講演室
講 師:森 茂起
(甲南大学文学部・人間科学研究所/臨床心理学)
助 言 者:森 年恵(甲南大学非常勤講師)
後 援:兵庫県臨床心理士会



ナラティブ・エクスプロージャー・セラピー研修会にて。「石と花」の実習場面。悲しかった時、うれしかった時にあわせて、人生の流れのなかにそれぞれ石と花を置いてみて、感情の流れを概観できるようにします。

甲南アトリエ

「親子孫子で楽しむアート
和紙を使った体験型アートワークショップ」

日 時:2015年3月12日(木)10:30~12:30
場 所:甲南大学18号館3階講演室
講 師:椋田 三佳(美術家)
企 画:内藤 あかね
(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)



和紙にクレヨン、絵の具を使って自由に表現してみました

● これからの活動

その他の企画

「地域のアーティストの地域精神保健サービスへの
参画の可能性について——フランスのリールが
イタリアのトリエステから学んだもの(ガタリとバザーリア)」

日 時:2015年3月23日(月)13:00~
講 師:三脇 康生(仁愛大学)
場 所:甲南大学18号館3階講演室
主 催:甲南アーツ&セラピー研究会
協 力:甲南大学人間科学研究所

「福祉国家のアートと教育
～デンマークのピフロスト美術学校の事例から」

日 時:2015年3月24日(火)18:30~
場 所:ギャラリー島田
講 師:ペア・キヨスコ・イエンセン
(美術家、ピフロスト美術学校創設者)
松塚 イエンセン 哲子
(美術家、ピフロスト美術学校美術教師)
座 談 会:服部 正(甲南大学文学部人間科学科准教授)<進行役>、
片山 みやび(美術家、美術造形教室アトリエトロッポ講師)、
鈴木 慈子(兵庫県立美術館学芸員)<通訳兼任>、
ペア・キヨスコ・イエンセン、
松塚 イエンセン 哲子
協 力:甲南アーツ&セラピー研究会、甲南大学人間科学研究所

発行年月日:2015年3月16日

今年度のニュースレターをお届けします。大型予算での活動に一区切りがつき、KIHSの活動も次のステップに向けて、模索中の段階です。諸事情で発行のペースを少なくし、今号は、増ページしたうえで、本年度の活動内容の報告となります。今号では、これまで継続してきた「父親の子育て」に関する報告と、芸術家にとってアートがセラピーとなるか迫った研究会の報告を中心に、本年度の活動をまとめてみました。ご味読ください。



編集後記

毎日の忙しさとは関係なく、季節はめぐり、あっという間に春が訪れます。賑やかであった研究所もだいぶ寂しくなりましたが、何とか1年間に生み出すことのできた成果の一部を報告いたします。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。



●実践プログラムの構想●

「地域での「癒やす力」「育てる力」を高める心理的・芸術的支援モデルの構築」

人間科学研究所では、実践活動として次のテーマでの取り組みを、従来の研究プロジェクトと並行して進めていく予定です。

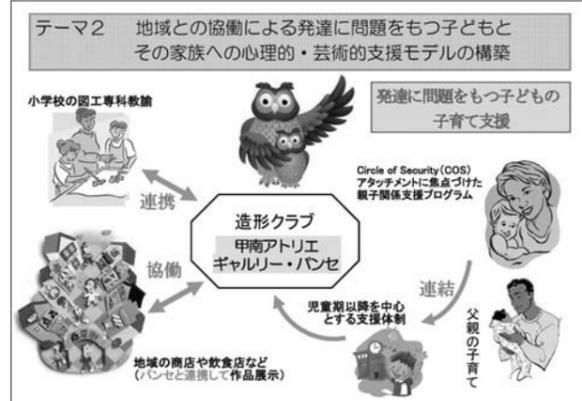
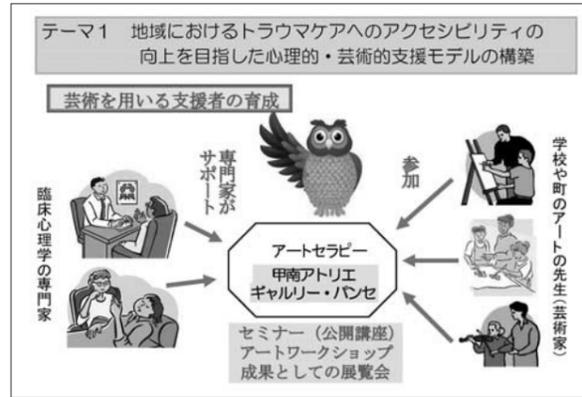
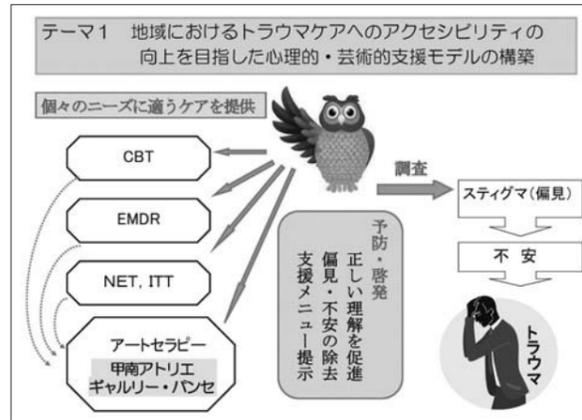
甲南大学のある阪神間は阪神淡路大震災や神戸大空襲のトラウマに今なお苦しむ人々がいる地域かもしれません。また、古くから画廊や美術館、美術教室、障がい者アートのアトリエなど芸術環境に恵まれてきました。臨床心理学と芸術学の専門家を中心に甲南大学人間科学研究所は、地域との協働によって①「癒やす力」を育むために、人々が安心して心の相談ができる環境を整え、芸術を治療的に用いる支援者の育成に取り組めます。また②「育てる力」を高めるために、乳幼児期の子育てから学校教育への心理的支援を連続させ、造形クラブによる子どもの発達支援を行ないます。地域の研究機関・行政機関との既存の連携を強化しながら、18号館講演室を「甲南アトリエ」として研究会やワークショップを催し、より地域に開かれた活動を目指していきます。

テーマ1「地域におけるトラウマケアへのアクセシビリティの向上を目指した心理的・芸術的支援モデルの構築」

心理的問題がもたらす悪影響(自殺や家庭内不平等)が目撃されて以来、その問題解決に有効な方法論が多く確立されてきました。特にトラウマケアでの問題点として、治療へのアクセシビリティの低さが指摘され、その背景に治療に対するスティグマ(偏見)の存在が考えられます。その解決のためには支援方法を明確化し、体験者が支援を受けやすい体制を構築するのみならず、非専門家がトラウマ問題について理解し、体験者の良きサポーターとなりうる体制も必要です。臨床心理学と芸術学が協働で各々の知見や方法論を持ち寄り、それを基にスティグマを克服して個々のニーズに合うケアを提供できるシステムを構築することで、メンタルヘルスサービスの新たな拠点として地域に根差すことを目指します。(1)過去の体験がもたらす問題とその支援策について、正しい理解を促進する啓発活動を実践します。(2)NETやLSW, EMDRや身体志向アプローチ、認知行動的アプローチ、芸術療法などを各ニーズに適った選択ができるようメニュー化し、地域に向けて発信・実践します。(3)自伝作成を行うNETに加え、芸術家に対して心理学的知識を提供する教育プログラムを作成し、芸術をケアに用いる支援者の輪を広げます。

テーマ2「地域との協働による発達に問題をもつ子どもとその家族への心理的・芸術的支援モデルの構築」

発達に問題をもつ子どもとその家族、あるいはその支援者に対して、



創作的活動と成果の発表を通じていかなる支援が可能であるかを探ります。絵画や立体造形など視覚芸術を中心に、音楽や朗読なども含めた創作的活動に関心を示す子どもに対して、創作に没頭できる環境を準備し、そこで得られた知見や子どもの創作物を、研究会や展示会などを通じて家族や支援者、地域住民にも広く紹介し、この活動の意義や関係支援における問題の所在についての共通理解を図ります。そのことにより、発達に問題のある子どもをいかに支援すべきかを、家族や学校だけの問題ではなく、地域に住む人々が当事者意識をもってとらえられる体制の確立を目指します。これまで人間科学研究所では、子育て支援の実践研究の実績があります。乳幼児期の子育て困難に対して、健全な愛着形成を目指した親子関係支援の有効性が認められてきましたが、ここに父親を含めた支援体制を加え、かつ、本研究における児童期以降を中心とする支援体制を検証していくことにより、子どもの成長に応じたより広範囲の関係性の支援へつなげます。

地域におけるトラウマケアへのアクセシビリティの向上を目指した心理的・芸術的支援モデルの構築

第76回 公開研究会 「トラウマケアを必要な人に『届ける』ためにできることを考える」

日時:2014年12月13日(土)15:30～
場所:甲南大学18号館3階講演室
講師:大澤 香織(甲南大学/臨床心理士)

芸術療法を含め多様な臨床研究・実践を行なう研究員が、地域への新たな支援を可能にするための啓蒙活動と支援者育成に取り組むプロジェクトの一環として、本学兼任研究員の大澤香織を囲んで研究会を行いました。

トラウマとなるような出来事を体験した人がすべて、外傷後ストレス障害(PTSD)などの心理的問題を抱えているわけではありません。体験者の多くが時間経過と共に回復していく一方で、後遺症に悩まされ続けてしまう人々があります。トラウマによる問題に悩む人々の健康や社会的機能の回復を目的に、これまで数多くの治療法が開発されてきました。その効果は多くの研究者の手で科学的に実証され、治療効果が認められた治療法は治療ガイドラインにまとめられ、現場で役立てられています。

わが国においても、トラウマケアを行う医師や臨床心理士が増えてきました。しかし、どれだけ後遺症に苦しめられていても、トラウマ体験者の多くはなかなか積極的に治療に行かない現実があるようです。どれだけ効果がある治療法があっても、その治療を行える専門家がいたとしても、その治療の恩恵を受けるべき人に届かなければ、残念ながら意味がありません。また、わが国では治療法ばかりが先走ってしまうことが問題視されており、それがまたケアを届きにくくさせてしまっている一因にもなっているようです。

本研究会ではこれまでの研究や臨床での現状などを紹介していただき、参加者の皆様と共にケアを必要とする人々にどのように適切なケアを届けていくか、後遺症に悩む人々に身近でできるサポートは何かを考え、探っていくことができました。

第4回 甲南アーツ&セラピー研究会 「医療現場におけるアートセラピーの実践」

日時:2015年1月29日(木)13:30～16:00
場所:甲南大学18号館3階講演室
講師:金井 菜穂子先生(市立奈良病院)

第5回 甲南アーツ&セラピー研究会 「人が悲しむときとそれが和らぐとき—私の求めている心理臨床—」

日時:2014年2月24日(月)16:00～19:00
講師:倉戸 ヨシヤ先生
(大阪市立大学名誉教授、日本臨床グешタルト療法学会理事長)

本講演会はJSPS 科学研究費助成事業(課題番号 25284046)「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。



内藤あかね先生、金井菜穂子先生

倉戸ヨシヤ先生

地域に開かれた、臨床に関する知識の提供のために、研究所の兼任研究員を中心としたアーツ&セラピー研究会では、関西地域の臨床心理士をお呼びして、アートと関わるセラピーの多様な実践について話をうかがう機会を設けています。本年度はまず、市立奈良病院勤務の金井菜穂子先生を呼びお話をうかがいました。金井先生は、アメリカでアートセラピーを学ばれた臨床心理士で、主に病院臨床の様々な分野でご活躍されています。今回は、アートセラピーにおける素材の特性と体験に関する理論を説明していただいたうえで、がんなどの末期医療の患者さんに対してアートセラピーを使ったグループワークの状況をお話いただきました。

さらに2月には、倉戸ヨシヤ先生をお迎えしました。倉戸先生は、アメリカでグешタルト療法を学ばれた心理臨床家で、かつて甲南大学でも教鞭をとられていた経歴があります。倉戸先生には、悲嘆を切り口に、どのようなときに人は嘆き、落ち込んだり、怒りを覚えるのか、どのようなときにそれらが和らぐのかを、豊富な実践例のなかからお話いただきました。伊勢湾台風、日航機墜落事故、阪神淡路大震災、大教大池田小学校児童殺傷事件、堺市O-157事件、東日本大震災における心理臨床のなかで蓄積してきた知見についてお話いただきましたが、その実践自体が戦後の日本のトラウマの歴史を振り返ることに間接的に関わる貴重なものとなりました。



活動報告

学会発表報告

日本心理臨床学会第33回 秋季大会・自主シンポジウム 「父親への子育て支援を考える(3) —父親支援の広がり—」

日 時:2014年8月23日(土)
報 告 者:濱田 智崇、川口 彰範、新道 賢一

臨床心理士による父親への子育て支援のあり方を考える。このことをテーマに、筆者らは2011年から実践活動を、そして2012年から日本心理臨床学会の自主シンポジウムでの報告を行ってきた。筆者らとは、甲南大学人間科学研究所第3期子育て研究会父親班(以下、父親班)のメンバー3名(濱田智崇、川口彰範。いずれも甲南大学人間科学研究所客員研究員。臨床心理士)を指す。父親班の3名は、いずれも甲南大学人間科学研究所第3期子育て研究会のメンバーとして、同研究会が行ってきた調査研究に参加し、特に2007年以降、それまで子育て中の母親を主な研究対象としてきた一連の研究を発展させ、父親にもその対象を広げることとなったときに、研究の中心的な役割を担ってきた。調査研究の主な内容は、甲南大学人間科学研究所のホームページにも掲載されている調査報告書、紀要論文、また「育て! パパごころ」というパンフレットにまとめられているので、ご参照いただきたい。

一連の調査のなかで、父親班は父親への子育て支援の可能性を見だしはじめた。父親は子育てについて語る場も機会も持っていない。しかし、インタビューで語ることによって、父親は自分の子育てについて振り返り、そのときどきの思いを再認識し、今後の子育てへの思いを新たにす。このことが父親の子育てへのコミットをより多くし、ひいては母親へのサポートとなるのではないか。父親に子育てについて語る機会を提供すれば、それが子育て支援へとつながるのではないか。語りを聴くことは臨床心理士が専門とするところである。臨床心理士であれば、誰にも聞かれることなく父親の中に埋もれていた子育て意識を引き出すことができるのではないか。

このようなことを考えるようになっていた中で父親班は、2011年5月から大阪市内で、子育て中の父親への子育て支援を行う機会を得た。時期はちょうど、前年に「イクメン」という言葉が新語流行語大賞にノミネートされたこともあり、父親の子育てについて世間の耳目を集めていた頃でもあった。

ところが、活動は盛況と呼べるような状況にはなかなか至らなかった。数は少ないながらも、私たちの活動を探し出し、わざわざ足を運んでくださった方もいた。妻から背中を押されて半ば強制的に参加させられた方もいた。参加者の多くは、普段語ることない子育てについて語ってみることでどこか気持ちが楽になれた、というような感想を述べていた。

自主シンポジウムでは、支援の場で何が起きているのか、どのような要因が父親の支援の場への参加を難しくさせているのか、などを報告した。

自主シンポジウムの参加者からは、心理士が父親へ働きかけることの難しさなどが語り合われた。

課題の多い活動ではあるが、今後もこの活動を続けたいと考えている。
(新道 賢一)

光島貴之 講演会

「芸術家にとって創作はセラピーか —ぼくは創作活動で生活の危機を 乗り越ってきた」

日 時:2014年12月15日(月)18:00~19:30
場 所:甲南大学18号館3階講演室
講 師:光島 貴之(美術家、鍼灸師)
司 会:服部 正(甲南大学/芸術学)
主 催:甲南アーツ&セラピー研究会
協 力:甲南大学人間科学研究所



光島 貴之氏

甲南アーツ&セラピー研究会では、JSPS科学研究費助成事業(基盤研究(B))25284046「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表研究者・川田都樹子)の助成を受け、芸術学と芸術療法の関係に着目した研究会を昨年度から開催しています。この研究の共同研究者である服部正は、主に障がいのある人の創作活動に注目し、それらが「美術」として語られる場面での評価のあり方について研究を進めています。甲南大学人間科学研究所の協力のもとに開催した今回の講演会では、現代美術の領域で広く活躍しておられる全盲の美術家の光島貴之氏に講演をお願いしました。

障がい者福祉施設における創作活動の意義を考える場合、それをセラピーと呼ぶかどうかはともかくとして、通常は作者が作品を作るといふ行為が作者自身にもたらす作用や、作品を展示することが作者自身にとってどのような意味があるかが考慮されます。一方で、一般的な美術作品の鑑賞の場面では、制作行為が作者自身にもたらす効用などということはほとんど考慮されず、専ら作品の芸術論的な解釈や社会的な意義などが問題とされます。

では、作品が社会の中で鑑賞され、解釈されるということを前提として制作を行っている人、すなわちプロの美術家は、創作行為が自分自身に及ぼす治癒的な効果ということをどのように意識しているのでしょうか。そのことを考えるために、視覚障がいという障害をもちながらプロの美術家として活躍している光島貴之氏をお招きして、作品を発表するプロの芸術家としての視点と、視覚障がいに向き合いながら美術の創作を行う障がいのある人としての視点の双方から、自身の創作活動について語っていただきました。

今回の講演で光島氏は、わずかな視力で生まれた時から10歳の頃の失明、盲学校から一般の大学へと進学した学生時代、教員になることを断念して鍼灸院を開業した経緯、作家としての活動を始めた時期から現在の活動に至る作風の変化など、ご自身のライフヒストリーを障がいとの関係性のなかで解釈しながら、その詳細で綿密な分析を展開されました。

その中では、作品の発表を始めて美術の世界に深くコミットするようになった時期に、逆に抑うつ的な気分が高まったという経験や、樹を描く時にどうしても単独では描けずに複数の樹を同時に描かずにはいられなかった経験と自分の依存的な気質に関連を見出していたこと、それがインスタレーションなどの大きな作品へと作風を展開させることで克服できたこと、脳梗塞によって身体の崩壊感覚から立ち直る際に創作活動が役立ったこと、見える人との関係をどう考えるかが創作のアイディアにつながるが多いということ、見える人と見えない人の関係をポストコロニアル理論の枠組みで考えることの有効性など、芸術学だけでなく、心理学や社会学的な観点からも非常に興味深い事例を率直にお話いただきました。

当日は、慌しい師走の平日の夕方という開催時期にもかかわらず、35名の参加者があり、後半の質疑応答も多岐にわたるものでした。

(服部 正)

活動報告

シンポジウム 「トラウマとユートピア： 戦後から現代における アジア美術の相互影響関係」

日時：2014年10月9日(木)9:30～17:00、
10月10日(金)10:00～17:30
場所：虎ノ門ヒルズフォーラム 5F ホールA2～A4
報告者：石谷 治寛(甲南大学人間科学研究所博士研究員)

研究会 「トラウマ文化、観衆と情動」

日時：2015年2月26日(木)
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：キャサリン・ハリントン(東京都現代美術館インターン)
コメンター：森 茂起(甲南大学、臨床心理学)
企画：石谷 治寛(甲南大学人間科学研究所博士研究員)

本研究所では、これまでの研究活動の一環として、トラウマという概念を軸に加害-被害をめぐる理論的研究や、戦後の神戸での疎開体験をめぐる歴史調査を行ってきた。トラウマという概念は、心理臨床の領域を超えて、メディア論や映画学、芸術史でも近年ますます注目が高まっており、芸術学を専門とする博士研究員は、研究所の研究活動の一環として、視覚芸術においてトラウマがどのように表現されてきたかの検証を進めてきている。本年度は、アジア地域におけるコンテンポラリー・アートをめぐる東京で行われた国際シンポジウムに参加・発表を行った。また、後日、英国の大学でのトラウマと文化研究について、東京都現代美術館でインターシップ中のキャサリン・ハリントンさんに報告してもらった。

東京で行われたのは、森美術館と2012年に創設されたテート・アジア太平洋リサーチセンター(ロンドン)との共催企画で、戦後から現代におけるアジア各地の美術が、相互にどのような影響関係にあるかを探るシンポジウム「トラウマとユートピア」である。本シンポジウムでは、戦争からの復興、民主化、近代化、都市化など地域によってそれぞれ異なる政治的、社会的な発展をしてきたアジアにおいて、「トラウマとユートピア」という言葉を、「アジア圏内での相互交流や影響関係を探る」ための重要なキーワードに据えている。

本シンポジウムは戦後東京の建築に関する基調講演やアジアの都市空間への芸術による介入という話題からはじまったが、「トラウマ」という言葉が、ユートピアという言葉と対になることで、「心の傷」というよりも、物理的空間の破壊や荒廃やディストピアといった漠然としたイメージとして捉えられていたことに、文化領域でのこの語の濫用の危うさを感じないでもない。確かにトラウマ的心性には場所の感覚の混乱や不確か

さがともない、それは物理空間の崩壊と切り離すことができない。しかし、語の適用を拡大することで、人間存在と不可分な苦悩や悲嘆すべてが「トラウマ」と括られることになってしまいかねない。どこまでが治療を必要とする精神疾患に類する状態なのか、そうでない領域も「トラウマ」と言いうるのか。この語の用法の歴史を再検討する必要があると感じている。

いずれにせよ、アジアの各地を出自とする美術史家たちの発表を通して、都市の建築や電子メディア、写真や身体、ナショナリズムや現代の工場労働など、多岐に渡る話題が提供された有意義なシンポジウムとなった。森美術館から報告書が発刊されるはずなので、そちらをご覧いただきたい。

周知のように1980年代以降に心理学の領域でトラウマ概念への関心が高まっていくが、文化研究における広がり発端となったのは戦後50年を迎えた時期のホロコースト研究によってである。くしくもルワンダの内戦やボスニア=ヘルツェゴビナの紛争が高まり、現在でも民族浄化が行われうるのが公然となった時期であった。

研究会「トラウマ文化、観衆と情動」では、強制収容所への「移送」を担ったアドルフ・アイヒマンの裁判映像を再編集した映画『スペシャリスト』を改めて鑑賞し、元となる哲学者ハンナ・アレントのテキストについて議論した。あわせて、英国リーズ大学でのトラウマに関する文化研究からのアプローチについてハリントンさんに報告してもらった。アレントが指摘したのは、裁判における劇場的な性質と、ユダヤ人の犠牲者が排他的に強調されたことに対する違和感である。トラウマの文化研究は悲劇や犠牲の状況を究明すると同時に、ともすると自らの傷を強調するあまり、他所の場での傷に目を背けがちになる。あるいはその逆も然りである。その意味で国際的な枠組みでトラウマについて議論する場が増していることは、他者の歴史の観点から自分の歴史を見直すことができる絶好の機会となろう。研究所としてもいっそうこうした機会を提供できるよう取り組む必要性を痛感している。

本研究会は、科学研究費「視覚芸術におけるトラウマと心理ケア——芸術と臨床の連携に向けた歴史研究と理論構築」(研究課題番号：24720084)の支援を受けています。

2014年度の活動

公開シンポジウム

「甲南大学心理臨床カウンセリングルームによる 子育て支援の15年——臨床心理士の視点」

日時：2015年3月7日(土)13:30～16:00
場所：甲南大学18号館2階演習室1
話題提供：岩本 沙耶佳(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム)、
濱田 智崇(京都橘大学)、
藤原 雪絵(甲南中学・高校スクールカウンセラー)
司会：新道 賢一(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム)
指定討論：三宅 理子(東海学園大学)

これまで、甲南大学心理臨床カウンセリングルームの子育て支援に携わってきたスタッフを中心に、甲南での子育て支援の経験が各々の臨床経験にどのように生かされているのかというから、議論を深めました。

公開研究会

第76回 公開研究会 「トラウマケアを必要な人に『届ける』ために できることを考える」

日時：2014年12月13日(土)15:30～
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：大澤 香織(甲南大学／臨床心理士)

公開講座

第4回 子育て支援者スキルアップ講座 「アタッチメントに基づく親子関係支援」

日時：2011年5月17日(土) 13:30～15:00
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：北川 恵(甲南大学／臨床心理学)

第5回 子育て応援講座 「子どもの安心基地になるために」

日時：2014年6月26日(木) 10:30～12:00
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：北川 恵(甲南大学／臨床心理学)

引き続きCOSプログラムを継続して行っており、新聞で取り上げていただくなど、好評を頂いております。

公開研究会(協力)

第2回絵とことば研究会 「『セラピスト』はどうことばにしたのか」

日時：2014年12月7日(日)13:00～16:00
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：佐々木 玲仁先生
穂刈 千恵先生
香月 菜々子先生
司会：高石 恭子先生
指定討論：川田 都樹子先生



最相葉月氏の著作『セラピスト』(新潮社)を手がかりに、絵をことばにすることの意味と可能性について、臨床実践を行ってきた立場から、また芸術療法や芸術批評の視点から語りました。会場に訪れていたいただいた最相さんにもコメントを頂くことができました。

「光島貴之 講演会 芸術家にとって創作はセラピーか——ぼくは創作活動で生活の危機を乗りきってきた」

日時：2014年12月15日(月)18:00～19:30
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：光島 貴之(美術家、鍼灸師)
司会：服部 正(甲南大学／芸術学)
主催：甲南アーツ&セラピー研究会
協力：甲南大学人間科学研究所

第4回 甲南アーツ&セラピー研究会 「医療現場におけるアートセラピーの実践」

日時：2015年1月29日(木)13:30～16:00
場所：甲南大学18号館3階講演室
講師：金井 菜穂子先生(市立奈良病院)

第5回 甲南アーツ&セラピー研究会 「人が悲しむときとそれが和らぐとき—私の求めている心理臨床—」

日時：2014年2月24日(日)16:00～19:00
講師：倉戸 ヨシヤ先生
(大阪市立大学名誉教授、日本臨床グジュアル治療学会理事長)
司会：椋田 三佳(美術家)

本講演会はJSPS 科学研究費助成事業(課題番号 25284046)「芸術学と芸術療法の 共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。